みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アフリカにおける障害者の生活世界：その地域性と歴史性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, 美佳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008685

評論 展望

アフリカにおける障害者の生活世界

―その地域性と歴史性

文・写真 戸田美佳子（とだみかこ）

私は、2006年からカメルーンやコンゴ共和国、コンゴ民主共和国をフィールドとして、障害者の生活に関する人類学的調査を進めてきた。これまでの障害者研究においては、障害者は「社会的困窮者」として一面的にとらえられる傾向が強かったが、私は、自然資源の利用や分配に注目する生態人類学を専門としていることもあり、具体的な生業活動の場面に注目して、障害者と周囲の人びとの相互関係を研究してきた。障害者は生きていくうえで、日常的にさまざまな手助けを必要とする存在だが、それゆえにこそ、周囲とより濃く密接な関係を必要としており、また高度に「社会性」を利用しているというのが、そこから得られた知見であった。そして、そうした障害者の生活の実態をとおして、さまざまな立場や地位、階層からなるアフリカの重層的な社会を紐解いていくこともできると思えてきた。

庶民の居住区で暮らす男性（2016年8月、コンゴ共和国ブラザヴィル市）。

そこで本稿では、これまでの調査経験を踏まえ、障害者をはじめとする扶助の必要な人びとに焦点を当てることでみえてきた、アフリカ研究や狩猟採集民研究への展望について報告する。本事例では、生業活動を実践するうえで何らかの助けを要するような身体障害者を中心に扱うが、アフリカにおける障害者を取り巻く問題については、身体と精神の双方を含む障害全般を対象とする。

アフリカにおける障害者問題

アフリカに暮らす10億人のうち、心身の機能的な障害をもつ人びと（身体、精神、および重複障害）は3～10％とされ、その数はすくなくとも3～5千万人と見積もられている。現在のアフリカにおいて身体的な障害を引き起こす要因は、工業化にともなう環境汚染や交通事故、感染症、紛争など多岐にわたっており、貧困と強く結びついている。このようなことから、近年、開発分野においても障害者問題が注目を集めつつある。MDGs（ミレニアム開発目標）策定の翌年にあたる2001年にCRPD（国連障害者の権利条約）が提案され（2008年に発効）、2016年5月時点でアフリカの54カ国のうちの43カ国が条約を批准している（United Nations Enable 2016）。その数は、同条約に批准した計168カ国の4分の1に達し、大陸別の批准率では南米に次いで2番目である（2016年5月時点）。CRPDに積極的な国々が南米やアフリカで多いのは、国際協力に関する条項がCRPDのなかに明記されており、技術援助・経済援助を求める開発途上国にとって、それが魅力のひとつとなっているからだろう。また、MDGsの後継として2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）においては、障害者の問題が具体的な開発目標のなかに言及されるようになっている。

このように、障害者の権利保障や開発政策のなかで障害者を位置づけることの重要性がアフリカの文脈でも強調されるようになっている。ただし、障害者を開発戦略に包摂する必要性が問われるようになったのは、前述したような現代的問題だけではなく、アフリカ社会や文化に対する外部からの見方も影響してきたのではないだろうか。それは、アフリカに暮らす障害者が周辺化され、排除や差別を受け、結果として深刻な貧困に直面してきたという理解である。

アフリカ諸国における障害者に対する公的な支援や組織的な慈善活動は、近年西欧から持ち込まれたものであり、国家としての対策が十分に個々の障害者に届いているとはいえない。多くのアフリカ諸国では、資金が不足する政府の代わりに、外国の寄付団体や非政府組織が障害者のための資金集めに奔走してきた。資金を集めるためには同情を引き起こした方が効果的である。募金キャンペーンなどの活動をとおして、非常に悲惨な状態で生きる障害者の姿が世界に提示されたのである。

その際、アフリカにおける障害者を取り巻く問題として強調されたのは、政府や専門家による対応ではなく、障害者に対する周囲の人間（多くは家族や居住集団）の態度であったと、南部アフリカで調査してきたIngstad（1997; 1999）は指摘している。たとえばマスメディアをとおして私たちに発信されてきたのは、アフリカの人びとが、貧しさゆえに他者を顧みる余裕がなく、障害者を放置している「ケアしないアフリカ」のイメージである。さらに世界保健機関などの国際機関をとおして、アフリカでは障害が呪術的観点から差別のもとになるために、障害者が外部に対して隠蔽されているという「隠された障害者」像が報告され、やがて「公式の事実」とされるようになってきたという（Ingstad 1997; 1999）。

アフリカの森に暮らす身体障害者

こうした「隠された障害者」像とは対照的に、私がカメルーンで出会った障害者は、村や町で農作業をしたり、母や父として子育てをしたりする「あたり前」の日常を営む人びとであった。

はじめてカメルーンを訪れた2006年、首都ヤウンデの国際空港に降りたち、街中を散策すると、そこで驚くほど大勢の身体障害をもつ人びとが私の目に飛び込んできた。スケートボードのような台にコロを取りつけた乗り物に乗り、交差点を駆けまわって物を乞う少年たち。行き先を記した紙を手にタクシー運転手と交渉する聾（ろう）の少女。毎日のように街中で出会う障害者の姿が私の眼に印象深く映り、この国に暮らす障害者の営みをもっと知りたいと思った。せっかくならば、奥

地の森のなかで調査をしてみたい。そう考え、首都から600キロメートル離れたカメルーン東南部の熱帯林地域に位置する東部州の村に入ることにした。

東部州は、コンゴ盆地に広がる世界第2の森林面積を誇る熱帯雨林地域の北西端に位置する。そこには、ピグミー系狩猟採集民の1集団であるバカ（Baka）と呼ばれる人びとと、おもに焼畑農耕を営む複数の言語集団の人びと（以下「農耕民」と呼ぶ）が住んでいる。両者の関係は、一緒に作業をすることはあるものの、その形態は労働を提供する側と雇用する側にはっきり分かれたかたちになっている。つまり、バカの人びとが農耕民に農作業などの労働力を提供し、それに対して農耕民は、バカの人びとに現金や農作物、酒などを支払うのである。

狩猟採集民バカの人びとの食べ物の多くは、森で手に入れる野生動物の肉や蜂蜜、野生ヤムなどのイモ類や木の実である。バカの人びとも農耕民と同じように道路沿いの集落に定住化が進んでいるとはいえ、乾季になると、最小限の家財道具をもって集落から森のキャンプへと移動し、木や葉を組み合わせて簡素な小屋をつくり、狩猟や採集、漁労を中心とした遊動的な生活を営んでいる。

このように狩猟採集民の暮らしは、多様な資源を生み出す熱帯林という生態環境に適応したかたちで営まれている。こうした狩猟採集民社会においては、彼らがおこなう作業の多くが、1人で最初から最後まで遂行することが可能であり、基本的に他人の助けを必要とするものではないと指摘されてきた（e.g. 今村 1993）。しかし狩猟採集民社会においても、身体障害者をはじめとする相互扶助が必要な人びとが暮らしている。彼らが1人で何もかもおこなえるジェネラリストでいられるわけではないだろう。

私が調査地で出会ったジェマ（仮名）という狩猟採集民の男性は、目が不自由であったが、よく農耕民やバカの女性たちと一緒に台所で作業したり、村の男たちと酒を飲み交わしたりしていた。下半身が麻痺して歩けないアヴァンダ（仮名）という男性は、仲間に背負われて森のキャンプに参加していた。もちろん、目や肢体の不自由を抱えた狩猟採集民の多くは狩猟や採集活動に参加することはできないが、同じように食料の配分を受け、おしゃべりを楽しんでいた。

そもそも狩猟活動は、彼らの間でも技術の差が大きく、同じように狩猟に参加したとしても、いつも獲物を仕留める人、逆にいつも誰かの獲物をわけてもらう人という差がある程度はっきりしている。それでいて、いつも獲物を仕留める人が偉そうにしているか、というと決してそうではないのが彼らの社会といえる。「わけてやる」というのではなくて、その場にいる人びとに対して、つとめて自然に食料が分配されていく。

ただし障害者の場合、現在でも森での移動生活が重要な生活の一部となっているバカの生活は楽ではないはずである。目の不自由なジェマの例でも、妻がジェマを家に残して、仲間と森のキャンプに出かけてしまい、何週間も帰ってこないということがあった。彼の妻が「ジェマのことをよろしく」と誰かに託している様子もない。私はどうなることかと、ハラハラしながら見ていたのだが、実際には村に残っているいろんな人たちが、非常にさりげないかたちでジェマと接しながら、ジェマはいつもの生活を続けていた。さらには、狩猟採集民の仲間たちが森に出かけている間、ジェマはよく農耕民の村を訪れ、キャッサバ芋をひいて粉にしたり、草刈りをしたりと、自分のできる仕事をして、その対価として農作物や食事をわけてもらっていた。ジェマは狩猟採集民の共住集団のなかで分配に与かる者でありつつ、さらに農耕民との関係性を利用し、村という社会空間においても生活基盤をもっていることが、彼の生業と生存の可能性を広げているようであった。

移動生活の多い狩猟採集民社会において障害者への特別な配慮がないことは、ときとして彼らにとって世話人の確保を困難にするだろう。障害をもつバカが生計活動や日常生活における手助けを、親族のみに恒常的に頼るならば、親族の生活リズムが変わり、そこに葛藤や緊張関係が生まれる可能性もある。ジェマのような目の不自由なバカが、親族のみに頼らず、状況に応じて、狩猟採集民と農耕民の間の「労働を提供する側」と「雇用する側」という形態を利用して生活を営むことは、彼らの社会に世話をめぐる新たな緊張を持ち込まないための方策だといえるのかもしれない。

他方で、農耕民の側をみてみると、農耕民の障害者は、本人が同居する家族などの協力を得て、主体的に

生計を成り立たせていた。とくに、身体障害をもつ農耕民男性は大多数がカカオ畑を所有していた。ただし森での狩猟や採集と同様に、村での農作業もまた、身体障害を抱える人にとっては容易な活動とはいえない。この地域の現金獲得として重要なカカオは樹高1～5メートルの枝や幹に実をつける。たとえば、ジュドネ（仮名）は、30代の農耕民男性で、幼少期にポリオを罹い、下半身の麻痺を抱えていた。彼にとって、長い棒を使って高い枝になるカカオの実を収穫する作業は困難である。そこで、彼はカカオの実を収穫する際、狩猟採集民の少年や青年から手伝いを得ていた。カカオ収穫期には狩猟採集民と農耕民の労働－雇用関係がごく一般的に結ばれており、彼もそれを利用してカカオ生産をおこなっている。こうした状況はジュドネに限ったことではなく、障害がある・ないということが、農耕民男性の農地の所有に差を生じさせていなかった。彼らは雇用や共同労働を活用しながらも、自身で農地を伐開し、カカオの実の点検や収穫といった1年を通じた活動を主体的に計画・実施していた。彼らは、その意味において障害者や「社会的困窮者」ではなく、まさに「農耕民」であるといえるだろう。

手回しの車椅子に乗ってカカオ畑に収穫にいくジュドネ（2007年9月、カメルーン東部州）。

インター・エスニックな生業活動とその歴史性

「障害」という言葉はもともと、英語のdisabilityという語にみられるように、当該の人の労働生産性が低いという理由で、障害者を社会的に排除することを正当化するコンテクストで用いられてきた（Oliver 1996）。このように労働力を「個人の能力」としてとらえるなら、農作業や狩猟採集のような身体的な労働で生計を立てる社会では、身体障害者の生業活動は不可能もしくは著しく困難であるということになるだろう。

しかし、ジュドネは父から相続したカカオ畑によって、村のなかで他の人たちと同様に農耕民として暮らしていた。こうした状況はジュドネに限ったことではなく、カメルーン熱帯雨林地域の農耕民男性の農地の所有や、狩猟採集民同士の狩猟・採集物の分配を観察したところ、そこには大きな差異が生じていなかった。

調査地においては障害をもつ・もたないにかかわらず展開している活動とは、環境から資源を得て暮らしを成り立たせる営み、すなわち生業であり、それは親族関係や地域集団の柔軟な相互関係のなかでおこなわれている。ただ、身体的な障害をもつ人びとが生業活動を営むためにはそれ以外の他者からの手助けがやはり不可欠である。そこで、狩猟採集民と農耕民という集団を越境した関係が重要となっていた。

とするならば、障害者の生業は、狩猟採集民と農耕民の混住によって実践できているという事実がある。ただし、このような生業活動におけるインター・エスニックな関係は、定住化が進んだ1950年代以降の現象といえる。そこで調査地における社会環境の変容を歴史的に概観してみたい。

フランスによる統治がはじまる以前、カメルーン東南部の狩猟採集民バカは森林キャンプを移動しながら生活を営んでおり、農耕民は森林内の集落に居住していた。この地が、国家という枠組みのなかに取り込まれたのは、第1次世界大戦後の1920年代にフランスの委任統治領になってからである。その後、森の住民は道路沿いの集落に居住し強制労働に従事することが求められるようになる。時期を同じくして、カトリックやプロテスタントの宣教師団が進出してきた。

1930年代から50年代にかけて、フランス政府によって、東南部にカカオ栽培が導入されると、農耕民の道路沿いへの定住化が進むことになった。現金を利用することがほとんどなかったバカにも、道路沿いで焼畑農耕を始めた近隣農耕民との関係によって変化が訪れ

た。バカは、カカオ栽培を始めた農耕民の畑で働くようになり、その労働力への見返りとして、現金を手に入れ始めたのだ。そしてフランスからの独立前夜となる1950年代におこなわれた2度目の定住化政策によって、バカは、農耕民がすでに定住していた道路沿いの集落に移動し、そこを拠点に生活を始めた。

このように定住化と同時期におきたカカオ栽培の開始は、現金獲得源の創出や農作業の性別分業、そして農耕民との間の雇用関係を生み出し、地域集団のなかで、生計活動や日常生活におけるさまざまな手助けに対して、その対価を支払うことを可能にしてきた。それが現在、障害者が生業活動のための社会的なネットワークを獲得する、ひとつの手段となっている。

このように考えると、本稿の事例は、ポスト狩猟採集民社会への移行や、アフリカ社会のひとつの特徴であるエスニシティの混在とその不均衡な関係が関与している現象としてみえてくる。そこからは、障害者が、個々の時代背景に影響されながら、共同体における彼ら特有の役割期待のなかで生活していることがわかる。私たちは、共時的な観察で見落としてしまう問題、つまりは、社会的背景と地域の歴史的背景のなかで、障害者の実態を把握していく必要があるだろう。

カメルーンの首都ヤウンデのイスラーム地区で施しを乞う人びと（2016年8月）。

慈善という言説

では、農耕化や定住化が始まる以前、つまり遊動生活が中心であった時代の障害者はどのように暮らしてきたのだろうか。それは現時点ではわからないが、日本では縄文時代の遺跡から、四肢に重い障害を抱えた人骨が発見されたことがあり（鈴木ほか 1984）、障害をもつことがただちに彼らの生存を困難にしていたとは限らないだろう。発掘された脚の骨は10年以上も使われた形跡がなく、おそらく自分ではほとんど動くことができないまま、誰かに食事を運んでもらったりしながら生き延びてきたと考えられている。

他方で、より近年に顕著になった問題として、イスラームとキリスト教が広がるにつれて徐々に地場を獲得していった弱者と慈善に関する言説がある。たとえば、歴史的にイスラーム国家に属していたアフリカ北部を中心とする地域では喜捨思想が重要視されており、身体障害者は物乞いによって生活を成り立たせることが可能となっている。また、キリスト教の普及により、障害はチャリティの対象へと変化し、障害者の教育は、財源の乏しい政府ではなく宣教師や慈善組織、篤志家によって担われてきた。

カメルーン森林地域の障害者も外部社会との関係を深めつつある。この地域では、1970年代に宣教師によるチャリティが普及し、障害者施設の建設（および慈善的施設ケア）が進んできた。それにより、農村部の障害者も病（障害）の治療（リハビリテーション）のための移動が促されている。さらに1990年以降には、先住民運動の活発化とも連動し、身体障害をもつバカの子どもに対する「マイノリティ（狩猟採集民）のなかのマイノリティ（障害者）」のための慈善活動がおこなわれている。それは同じ地域に暮らす狩猟採集民バ

カと農耕民に、「支援の対象となるバカの障害者」と「それ以外の障害者」という新たな枠組みをつくり出している。こうした2つの集団間につくられた新たな線引きは、狩猟採集民と農耕民のインター・エスニックな関係性のなかで生活をしてきた障害者の生業実践に大きな影響を与えるように私は感じる。

障害者のライフコースと地域史

こうしてみると現在のカメルーンの障害者の状況は、さまざまな影響が積み重なっていると考えられる。簡単にまとめると以下のとおりである。

フェーズⅠ：1950年～ 定住化と農耕化
⇒インター・エスニック関係、農作業の性別分業、現金獲得源の創出
フェーズⅡ：1975年～ チャリティの普及、宣教師のネットワーク形成、障害者施設
⇒病の治療のための移動、都市（町）と村の可変的な生活実践の始まり
フェーズⅢ：1990年～ マイノリティのための支援
⇒選別される障害者
フェーズⅣ：2006年～ 障害者の権利擁護運動と障害者団体の組織化
⇒障害者の集団化と国家政策の動き

私はこうした状況をさらに深く考察するために、現在、「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」という科研費（若手）プロジェクトのなかで、障害者個人のライフコースをとおして、その人を取り巻く生活世界の変遷を辿ることを試みている。本研究で用いる概念のライフコースとは、「諸個人が年齢的に分化した役割（role）と出来事（events）をとおして辿る道（path way）」（Elder 1978: 19–22）のことである。

これまでの欧米でのライフヒストリー研究では、障害者と非障害者とでは諸個人の年齢ごとの役割において異なる社会規範や倫理が適用されてきたと指摘されている（Priestly 2003）。たとえば、障害をもつ子どもの誕生を制限する要因はありうるのかどうか。成人期となり、労働や子育てといった「自立した」大人に期待されていることが、地域社会のなかで、障害者の障壁になりうるのかどうか。そして老年期では、機能障害をもつ高齢者と、より若年の障害者とでは同じような障害者としてみられるのかどうか。このように誕生から老齢を迎えるまで、障害者の各ライフサイクルの段階で障害の有無が問題になりうるという。

ただし、私はこれまでの調査経験を踏まえ、障害者のライフヒストリーを静的にとらえるだけでは十分ではないと考えている。なぜなら、障害者はその時々の時代背景に影響された固有の（時代の）人生経験をもっている可能性があるからである。

こうした地域史のなかで立ち現れる障害者のライフコースを明らかにしていきたい。そして、個々の時代において、障害者はどのような役割をもち、周囲からいかなる期待を受け、そのなかでいかに生き抜いてきたかという問いを個人の経験を基軸に明らかにすることで、アフリカ社会の文脈における障害観や人間観を描き出すことが、これからの大きな課題である。そしてその研究は、アフリカ社会研究にとっても大きな一助になると私は考えている。

【参考文献】

今村　薫 1993「サンの共同と分配──女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25。

鈴木隆雄・峰山　巌・三橋公平 1984「北海道入江貝塚出土人骨にみられた異常四肢骨の古病理学的研究」『人類學雑誌』92(2): 97-104。

Elder, G.H. 1978 Family History and the Life Course. In T.H. Hareven (ed.) *Transitions: The Family and the Life Course in Historical Perspective.* New York: Academic Press, pp. 17-64.

Ingstad, B. 1997 *Community-Based Rehabilitation in Botswana: The Myth of the Hidden Disabled.* Lewiston: Edwin Mellen Press.

—— 1999 The Myth of Disability in Developing Nations. *The Lancet* 354: 757-758.

Oliver, M. 1996 A Sociology of Disability or a Disablist Sociology. In L. Barton (ed.) *Disability and Society: Emerging Issues and Insights*. London: Longman, pp.18-42.

Priestly, M. 2003 *Disability: A Life Course Approach.* Cambridge: Polity Press.

United Nations Enable 2016 *Convention on the Rights of Persons with Disabilities.* (Internet 10th Octorber 2017 https://www.un.org/development/desa/disabilities/)

とだ みかこ

国立民族学博物館機関研究員。専門は生態人類学、アフリカ地域研究。中部アフリカをフィールドに、障害者に関する人類学的研究や、アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用に関する実践的研究に従事。著書に『越境する障害者──アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』（明石書店 2015年）、論文に「国境をまたぐ障害者──コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」──SDGsに向けて』（アジア経済研究所 2016年）などがある。